

司書のオススメ本

＜近大通信教育部図書館司書コースの実習生が選びました＞

『こすずめのぼうけん』

ルース・エインズワース（作）、石井桃子（訳）、
堀内誠一（画） 福音館書店
配架場所：絵本コーナー
請求番号：E||AIN

こすずめが初めて空を飛べるようになった日、お母さんとの約束を破り遠くへ行ってしまう。初めのうちは、空を飛ぶのが楽しくて「世界中を見てこられる」と思っていたすずめは、そのうち羽が痛くなり疲れてしまいます。そのため巣を見つけて休ませてもらおうとするのですが、泣き方が違うということで休ませてもらえません。疲れ果てて地面を歩いていると、ようやく同じ泣き声をした鳥に会うことができました。それはお母さんだけでも、名乗ることはせず、すずめを巣に連れ帰ってやります。温かい気持ちになれる絵本です。

『じゅげむ』

川端誠
クレヨンハウス
配架場所：絵本コーナー
請求番号：E||KAW

『じゅげむ』は、落語の中で、最もポピュラーな話です。めでたいからといって、生まれた子どもに長い名前をつけるが、「いないいないばあ」をするにも、その間に寝てしまう始末。子どもに幸せになって欲しい気持ちでつけた名前が、当の子どもの急場に空回りしてしまう馬鹿馬鹿しさ。生き生きした話とリズム。和尚さんが名前の意味を説明してくれるので、分かったつもりでいた言葉も再発見できます。小さい頃、じゅげむじゅげむ……と口ずさんだ記憶が思い出される一冊です。

『かわいそうなぞう』

土家由岐雄（文）、武部本一郎（絵）
金の星社
配架場所：絵本コーナー
請求番号：E||TSU

戦時中、上野動物園で実際に起こった三頭の象の話です。テレビでも紹介されたことがあります。戦時中、動物園に爆弾が落ちて檻が破壊されてしまうと、動物たちが街へ逃げ大変なことになります。そのため、殺すことを決めるのですが、象たちは餌に毒を混ぜても気がついてしまうので、最後にとった手段が餌を与えないことでした。芸をすれば餌がもらえろと思いき、衰弱している身体で必死に芸をする象たち。それを見る飼育係や動物園の人たち。最後には、鼻を高く伸ばして、万歳の芸をしたまま死んでしまうのです。生と死を向き合う絵本です。

『おかあさんといっしょ』

藪内正幸（作） 福音館書店
配架場所：絵本コーナー
請求番号：E||YAB

犬、猫、ライオン、鹿、熊、猿、ウサギ、リス、キリン、象、カバの親子が登場します。「なにをして遊んでいるのかな？」や「なにを食べているのかな？」と話しかけてくる文章です。絵がリアルでとても温かみがあります。お母さんの慈しむような眼差し、愛情にあふれた絵本で、お母さんに引っ付いていた小さな子どもの頃を思い出しますが、大人にとっては、「なに」の先が見えてしましますが、自分の考えに少し蓋をして、色々な想像をして頭を働かせるのはいかがでしょうか？